

## 保育園訪問報告より

### 1. 園児の様子

- ・遊びが中心の学びの環境が準備され、園児がやりたいことが実現できる環境であった。
- ・子どもたちが自分の興味を持った遊びに熱中し、生き生きと活動していた。
- ・一人でなく、大人数で共に活動する場面が多く見られた。
- ・遊びの中で園児なりの思考力を働かせ、自分の思いを形にする取り組みをしていた。
- ・「自分のことを知ってほしい」「自分の話を聞いてほしい」という自己アピールができていた。
- ・遊びはごっこ遊びが中心で、ブロック遊びやお絵描きなども行われていた。これらの活動のコーナーは常設されておらず、遊びの時間に準備し、終われば片付けするという流れが徹底されていた。
- ・日々の生活を通して子どもたち同士が関わりをもつことを重視されていた。

### 2. 保育士の園児への関わり方

- ・声かけの基本は、本人の困り感がないようにするためのものであり、個々の行動に対して都度、個別の指導をする場面は見られなかった。
- ・気長に待つ姿勢があり、時間にとらわれない関わり方をしていた。
- ・子どもたちとの物理的・精神的な距離が近く、一人ひとりのことを深く理解しているため、子どもたちも保育士を深く信頼していた。
- ・大人主導ではなく、子ども主導の保育が実践されていた。子どもたちの「やりたい」という意欲から遊びが派生し、それが学びにつながっていた。
- ・保育士の関わり方は「穏やかさ」と「主体性の尊重」に特徴があった。
- ・口調は非常に穏やかで、声を荒げることはなかった。
- ・活動のベースは、子どもたちの「～したい」「～やりたい」という自発的な声。日頃から子どもたちが安心して自分の思いを伝えられるような人間関係が構築されているため、こうした声が自然に先生に届いていた。
- ・先生方は発達を理解する努力と、子どもの姿をよく見てとらえる努力に基づき、一人一人に合わせた支援を心がけられていた。子どもたちの動きを急かさず「待つ」姿勢が貫かれていた。